

や自動車・ロボットの対話での活用も考えられているが、実用化に向けては各分野の膨大な知識をデータ化することが必要である。

4. 脳情報研究とAI技術の研究開発 (Cinet)

最後に、大阪大学と共同で実施している脳情報の研究についてご紹介したい。これは脳の活動をビッグデータ化し、脳の活動を情報化することで、脳を学ぶAI技術の研究開発である。

脳の仕掛けを研究することで、次の世代の人工知能研究へのヒントを得ようとしている。

5. 最後に

社会のデータは今後もデジタル化され、人工知能によって利活用して、効率の高いシステムを実現していく時代がすぐそこにある。そのためにNICTは、質の高いデータを蓄積・整理し、皆が活用できる体制を構築しようとしている。研究体制も連携と協調、そして競争を作り出していくのか、知恵が必要である。協力をお願いしたい。

支 部 便 り



北海道支部
支部長
泉 高明

北海道支部として電気系単独での活動は実施しておりませんので、ここでは、今年開催された「青葉工業会北海道地区支部総会」について報告いたします。

例年実施しております北海道地区支部総会は、平成28年7月15日(金)に「札幌東急REIホテル」にて開催されました。本部からは青葉工業会副会長 湯上浩雄先生(工学研究科副研究長)が来賓として出席されました。支

部総会に先立ち北海道開発局豊平川ダム統合管理事務所長の伊藤禎朗様(土木・S63年卒)から「豊平峡ダムと定山溪ダムについて」と題したご講演があり、出席者皆さまにとっても有益な知見をご披露いただきました。

ご講演の後に支部総会・懇親会が行われ、来賓挨拶をされた湯上先生から最近の大学周辺の風景や雰囲気についても紹介いただきました。また、参加者から次々と近況報告があるなど、賑やかな雰囲気での会となりました。



東北支部
支部長
川又政征

平成27年度の「東北支部総会・懇親会」を平成28年3月11日(金)に、震災による建て替えが完了し、本格的に運用が始まった新しい電気・情報系1号館で開催いたしました。

総会では、中野春之支部長の御挨拶の後、平成27年度事業報告および会計報告が承認されました。次いで、平成28年度の支部役員として、支部長に私(川又政征)、幹事に中村健二先生と

た、後輩である現役の学生からも数名にスピーチをしてもらいました。学生21名を含め、約50名の方々に参加頂き、同窓生相互、先輩後輩の親睦を深める楽しいひとときを過ごすことができました。

また、平成28年3月25日(金)の午後には「卒業祝賀会ならびに同窓会新入会員歓迎会」が、約280名の出席のもと青葉山の電気・情報系101大講義室において盛大に開催されました。卒業祝賀会では、電気・情報系運営委員長である私と、電気通信研究所所長の大野英男先生からの祝辞、西関隆夫名誉教授のご発声による乾杯で卒業・修了を祝い、成績優秀学生を表彰し讃えました。続いて同窓会新入会員歓迎会では、野口正一同窓会会長から入会歓迎の挨拶があり、中野春之支部長からは激励の言葉を賜りました。歓談を挟んだ後、学部卒業生・大学院博士課程前期・後期修了生の各々の代表から学生時代の思い出や将来の抱負などの答辞があり、最後に山口正洋先生の万歳三唱で新入会員の門出を祝いました。

今後とも、母校のある仙台に拠点を置く支部として、同窓会活動のより一層の充実を目指すとともに、本部との連携強化も図っていきたいと考えております。引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

吉田真人先生が選出された後、平成28年度事業計画案および平成28年度予算案が承認されました。総会に引き続いて、秋の叙勲で受章された豊田淳一先生と、米山 務先生の講演が行われました。懇親会では、初めに秋の叙勲で受章された曾根敏夫先生、豊田淳一先生、米山 務先生に花束の贈呈を行い、曾根先生から御礼のお言葉を頂戴しました。引き続いて、野口正一同窓会会長のご発声による乾杯の後には、阿曾弘具先生、櫛引淳一先生、澤谷邦男先生、田苗 博様、越後 宏様、矢口暁久様から近況を交えて、後輩達に対する温かい励ましのスピーチを頂きました。ま



東京支部
支部長
菅谷 史昭

東京支部の主な活動は、東北大学電気・通信・情報同窓会総会及び東京支部総会の開催と若手交流会の開催です。その他に、仙台と東京で交互に毎年開催される東北大学電気情報フォーラムの支援があります。また、役員会を東京で2回、仙台で1回、年間で計3回開催しております。平成28年度の総会は、去る9月2日に学士会館にて開催されました。当日は97名の参加を得ることができました。これは前年比3割アップです。研究室ネットワークによるご案内、本部・支部のご努力、企業の卒業生ネットワーク、若手の口コミなど関係者のご努力にこの場をかりてあらためて感謝申し上げます。参加者は、過去数年は減少傾向でしたので、増加傾向が今後とも定着していくように皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

今回の総会では、野口正一 会長（電昭29、東北大学名誉教授、(公財) 仙台応用情報学研究振興財団理事長）、寺西昇 副会長（通昭33）、小泉寿男 会長補佐（通昭36、東京電機大学客員教授）の退任と、小野寺 正 次期会長（電昭45、KDDI (株) 取締役会長）、根元義章 次期副会長（通昭48、東北大学名誉教授、青葉工学振興会理事長）の就任が承認されました。退任される先輩におかれましては、これまで同窓会を盛り上げていただき大変ありがとうございました。交替時期は平成28年度末ですので、もうしばらくよろしく願い申し上げます。

総会内容は別に詳細な報告がありまので概要を述べるととどめます。議事に先立ち、野口会長より御挨拶をいただきました。プロダクトアウトからマーケットインへの発想転換、グローバルな人間ネットワークの形成の重要性とその実現にむけた同窓会の重要性と期待が述べられました。電気通信研究所の大野英男 所長からは、11月の仙台で開催されるフォーラムの案内がありました。菅谷史昭 東京支部長より2015年度事業報告・会計報告、2016年度事業計画・予算の説明を行い、承認されました。議事終了後、



東海支部
支部長
石井 隆一

前崎市)の見学を行いました。まず、同原子力発電所の安

東海支部では、去る7月9日(土)に第40回「東北大学電気系同窓会東海支部総会」を名古屋市内のレストランイタリッチにて開催いたしました。仙台より、ご来賓として東北大学大学院工学研究科電気エネルギーシステム専攻の斎藤浩海教授をお迎えし、支部会員49名の出席を得て、盛大な会合となりました。

当日は、総会に先立ち中部電力浜岡原子力発電所(静岡県御

国立研究開発法人 情報通信研究機構(NICT)の益子信郎様を講師としてお迎えし、『「世界が注目している日本のAI最新技術」～コンピュータに心は持てるのか!?～』の演題で特別講演を開催しました。中でも、音声翻訳技術の進歩は目覚ましく、会場ではデモを交えてわかりやすく紹介いただきました。様々な分野での活用についての多くの示唆をいただきました。総会後の懇親会では、岸本光弘東京支部副支部長の開会挨拶、小野寺次期会長の挨拶の後、根元次期副会長の発声で乾杯を行い歓談に移りました。一時間半の歓談の後に、若手交流会にて発表した同窓生からの近況報告と学生歌「青葉もゆるこのみちのく」を合唱し、渋谷昭宏 次期東京支部副支部長による閉会挨拶をいただき、盛況のうちに懇親会を終えました。

若手交流会は毎年12月に開催されます。若手同窓生の人材育成、先輩と後輩の縦の結束力の強化、二次会での若手の横の結束力の強化、さらには同窓会の発展に寄与することを目的に始められました。本執筆段階では昨年平成27年12月11日(金)に学士会館本館にて開催された第三回の若手交流会の報告をさせていただきます。「2020年に向けたビジョン(社会への貢献・グローバル競争で勝ち残るには・なりたい自分・etc.)」というテーマで、担当の若手には事前にプレゼン資料を準備いただき5分間の発表をいただきました。食事とお酒をいただきながら、プレゼンに対して先輩から時には厳しい励ましの中、知的刺激に満ちた和やかな会となりました。9社の会社から参加した若手と先輩、同窓会本部役員、東京支部役員の計22名が参加いたしました。この若手交流会に参加した若手は、翌年の総会に参加いただき近況報告をする試みも進めていますので、今後の同窓会を支えてくれることを期待しています。本年は4回目となりますが、平成28年12月2日(金)に開催する予定です。

これらの活動に加えて、地方支部役員に更なる連携を呼びかけたり、他のイベント担当者と意見交換もしています。東京支部は同窓会活動を推進することで、同窓会の活性化と会員同士の結束の更なる強化を推進する所存です。引き続き関係各位殿のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

全性向上の取り組みについて概要説明を受けた後、発電所構内を見学しました。発電所構内では、津波の侵入を防ぐ海拔2.2mの防波壁の他、緊急時海水取水ポンプや非常用ガスタービン発電機など、津波の構内侵入時や外部電源喪失時にも炉心冷却を継続するための様々な設備を間近に見ることが出来ました。さらには、これら非常用設備も使用不能な場合を想定して配備された、大型の電源車やポンプ車も見ることが出来ました。

さて、総会は常任幹事のMHIエアロスペースシステムズ(株)の清水将一氏(電昭54)の開会の辞で始まり、支部長の挨拶と前支部長の池田哲夫先生(通昭36)の乾杯音頭で宴に移りました。引き続き、ご来賓の斎藤浩海先生から、研究概要や母校の近況をご講演いただきました。

東海支部においては、ここ数年一定数の参加者確保のため、幹事や各企業の代表者が大変苦勞する状況が続いておりました。そこで、場所をホテル宴会場から街中のレストランの貸切に変更するなどし、会費の大幅削減を図った結果、多くの会員から早々の参加申込があり、さらには当日3名もの方が飛び入り参加されるなど、盛大な会合となりました。また、少々小さめの会場であったことから、歓談の声が会場内に響き渡り、これまでになく賑やかな雰囲気と

なりました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、次回幹事となる(株)デンソーの塚本晃氏(通昭60)から次回総会への決意を表明していただき、盛会を誓い合いました。会の最後は恒例の「青葉もゆるこのみちのく」を合唱した後、常任幹事の森正和先生(子昭48)による閉会の辞で締めくくりました。

以上、電気系同窓会会員皆様のご健勝を祈念しつつ、東海支部の報告といたします。

退職教授のご紹介



**亀山充隆先生
ご退職**

情報科学研究科情報基礎科学専攻知能集積システム学分野の教授として研究と教育に尽力された亀山充隆先生が、平成28年3月31日をもって定年により本学を退職されました。

先生は昭和25年5月12日に栃木県宇都宮市にお生まれになり、宇都宮高校を経て昭和48年3月に東北大学工学部電子工学科を卒業され、その後同大工学

研究科修士課程に入学され、昭和53年3月に電子工学専攻博士課程を修了されました。同年東北大学工学部助手に採用され、昭和56年助教授、平成3年教授に昇任されました。平成5年4月に情報科学研究科が創設され、本研究科教授として移籍されました。研究科長を平成22年4月から平成26年3月まで務められ研究科の研究・教育環境の整備などの管理運営にも多大の尽力をされました。

先生はリアルワールド応用知能システムのためのVLSIコンピューティングに関する研究分野を創始され、環境認識、予測・推定、行動計画といった多種多様な処理をリアルタイムで行うためのVLSIコンピューティングプラットフォームとその最適構成理論を提唱されました。さらに、多値マ

ルチプレクサロジック、2線式電流モード多値集積回路、局所演算性に基づく高並列多値演算回路、リアルワールド環境に適応した最適アルゴリズム選択、マイクロパケット転送に基づくダイナミックリコンフィギャラブルVLSI、非同期方式を活用したパワーゲーティング及び電源電圧自律選択、低電力多値リコンフィギャラブルVLSIなど、新概念を有する数々の先駆的研究をされました。

以上のような研究業績に対して、IEEE Technical Committee on Multiple-Valued LogicよりOutstanding Paper Award、計測自動制御学会技術賞、日本ロボット学会技術賞、電子情報通信学会論文賞、IEEE Fellow、電子情報通信学会フェロー、情報処理学会フェローなど多数の賞を受賞されています。学会及び社会等の活動においては、計測自動制御学会常務理事・論文集委員会委員長、IEEE MVL TC Chair、電子情報通信学会集積回路研究会専門委員長、Associate Editor of IEEE Transactions on Computers、電子情報通信学会東北支部長、情報処理学会東北支部長、大学設置・学校法人審議会専門委員、大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員、日本学術会議連携会員などを務められました。

先生はご退職後も石巻専修大学にて教育・研究活動を続けておられます。今後のご健勝とご活躍を祈念致します。(張山昌論 記)



**松木英敏先生
ご退職**

医工学研究科生体電磁波医学分野(工学研究科電気通信工学専攻兼担)の教授として、研究と教育にご尽力されました松木英敏先生が、平成28年3月31日をもって定年により退職されました。先生は宮城県でお生まれになり、昭和48年3月に同大理学部物理学科を卒業され、その後工学研究科博士課程後期3年の課程を経て、昭和55年3月に

工学博士の学位を取得されました。同年4月、東北大学工学部電気工学科に助手として着任され、平成10年2月に東北大学大学院教授(工学研究科)に昇任されました。その後、本邦初となる医工学研究科の設立に尽力され、平成

20年4月の東北大学大学院医工学研究科新設と共に同研究科教授となり、平成23年3月に発生した東日本大震災直後の平成23年4月から3年間は同研究科長をお務めになりました。設立間もない医工学研究科の運営に加えて、震災被害の復旧、復興に向けての様々な場面で研究科長として陣頭指揮を執られました。本医工学研究科が現在も尚、高い評価を得て活動を継続できているのも、先生のご尽力の賜物です。

先生のご研究は、電気工学、磁気工学、照明工学、医工学等に関する幅広い分野にわたりますが、一貫して磁気学に基礎を置く「電磁エネルギー変換工学」の発展の歴史となぞらえることができ、新しい「生体電磁工学」を興されたことと評価されています。中でも「感温磁性流体」の応用研究は、がんに対するハイパーサーミアに展開される事となり、医学界からも注目されました。また電気回路のLSI化を